

前回の大学院部会後の大学院部会審議まとめ(素案)に対する委員からの意見

【井上委員からのご意見】

<修正案>

p. 24 2段落目

なお、研究成果の社会実装という観点から、大学における研究者には、産業界における動向等を理解し、産業界と円滑なコミュニケーションを図る重要性が高まっていることを踏まえ、博士課程の学生の時点から産業界との共同研究等に携わる機会が積極的に与えられることが必要である。その際、産業界との共同研究等が、学生にとって過度な負担とならず、モチベーションを持って取り組めるようにするため、例えば、共同研究等を博士課程における授業又は研究指導としてカリキュラム上適切な形で位置付けておくことや、産業界から学生への経済的支援を獲得すること等の工夫が求められる。また、博士課程の優秀な人材確保や進学意欲の向上には、修士課程修了直結型の社会人博士の制度について、具体的な検討を始めることも求められる。

(理由) 以前の会議の折にも、意見を申し上げましたが、進学のモチベーションに大きく貢献すると期待されます。修士課程修了直後の社会人博士を増やし、安定した立場で研究との両立を図り、成功例を示していくことが重要であり、男女ともに有効な方法だと思います。是非、加筆をご検討ください。

p. 40 2段落目

キャリアパスを継続的・持続的に把握・可視化するため、博士人材データベース(JGRAD)を構築し、より多くの大学の参加を促している。NISTEPは、大39学の協力も得てJGRADの本格的活用を進めるため、登録者数の拡大に向けて、データベースへの継続的な入力・更新の負担軽減を図りつつ、登録者へ求人情報の提供や博士課程修了者のキャリアパス形成に役立つ分析を充実し、博士課程修了者への成果還元も進めていく必要がある。

博士人材を把握するためにはJGRADが実質的に活用されることが重要である。新規のテニユアトラック制度事業として、登録者DBをもとに1000人雇用規模の事業の創設を検討することにより、博士課程への進学の向上が促進され、優秀な若手博士人材の確保により我が国の技術革新の加速化が期待される。

(理由) 日本学術振興会の特別研究員制度(PD、SPD)の採用は、400名に満たず、アカデミックポストを希望する学生にとり博士課程への進学を躊躇する大きな要因となっています。学振PDほどの給与と研究費はなくとも、ひとりあたり600万円程度で、毎年の予算として1000人規模のテニユアトラックPD雇用は、国家予算からすればそれほど大きなものではありません。卓越大学院等の大学院教育改革

の事業と並行して、優秀な博士人材確保のためにはたいへん有効なものとなると思います。以前の会議でもこの趣旨を申し上げたがありますが、生活設計ができる制度の創設は、ノーベル賞クラスの発見や日本の技術革新に貢献する人材輩出に機能し、男女ともに博士課程進学へのモチベーションにもなると期待されます。2040年へ向けての提案として、是非、ご検討いただくようお願いします。

なお、11月の会議の折には、p. 35の6段目への意見として申し上げましたが、博士課程修了者の項が適切であると思いますので、こちらへ加筆のご検討をお願いする次第です。

<その他、些末な修正>

p. 7 下から2段落目 文末

…、また、比較的規模の大きい専攻においても未充足が発生しているケースもみられている。諸外国と比較して「知のプロフェッショナル」たりうる大学院修了者の割合が低いにもかかわらず何故このような状況についてとなっているのかを、改めて真剣に検討し検討を深め、早急に改善を図る必要がある。

(理由) 意味が取りにくかったので、シンプルにしています。また、「改めて真剣」は、常に真剣に議論している場には不要かと思います。

p. 8 一番下の段落

この例のように、各種施策の対象となった大学院においては、博士課程の後期三年の課程（以下「博士後期課程」という。）を含めて、大学院教育の実質化、リサーチ・アシスタント等の経済的支援や国際経験を積む機会の充実、産業界等と連携した教育研究が進んだものと評価できる。その一方で、…

p. 8 下の脚注

10 博士課程修了生全体の企業・官公庁就職者は約2割にとどまっている。

p. 9 3段落目

一方で、~~学士課程と同様~~、その内容については、抽象的で形式的な記述にとどまるもの、相互の関連性が意識されていないものも多いことなどが指摘されている。

(理由) 学士課程のほうがより具体的に記載されている例が多いように思いますし、断定は避けるべきかと。

p. 10 2段落目 下

この観点から特に博士課程教育リーディングプログラムについて、国は、日本学術振興会と協力しつつ、各大学におけるプログラムの事業期間が終了するタイミングと前後して、~~学生・修了生だけでなく、~~~~・修了生の雇用主・~~教員・プログラムオフィサー・~~修了生の雇用主等~~に対するヒアリングやアンケート調査といった手法の活用も含め、さらに具体的な成果や課題、他の大学院においても優れた取組を実践するために必要なプロセス等を整理し~~ずるための調査を行い~~、各大学に提供することを通じてその成果の~~各大学への~~定着を図ることが必要である。

p. 22 1段落目 (削除?)

~~なお、各大学は、博士後期課程における教育研究活動について、学生の進学への魅力を高める観点から、最先端の研究や学会への参加、論文誌への投稿等のより高度で魅力的な経験に関する情報の提供等により、修士課程及び博士前期課程との差別化を図るという意識を持つことも重要である。~~

(理由) p. 35 5段落目(後述)にもあるので、くどくなることと、教員の意識としては常にもっているもので、ここでは削除してもよいかと思います。

p. 23 3段落目

今後の大学教員は、自らが専門とする学問分野の特定テーマについてのみ講義が行えるということではなく、当該学問分野の全体像や関連するテーマについても、~~少なくとも~~学士課程における講義~~やを行い、~~また英語で講義を行う能力が基本的に求めら~~ているれるよう~~~~になつてくる~~という指摘、…

(理由) 現在、学部をもっている大学では、大学院所属であってもほぼ学部生への講義は行われていると思いますので。

p. 23 5段落目

あわせて、各大学は「~~同一研究領域同質者~~の間では学問的刺激も弱く、新しい学問分野の生成が生じにくい」ということ、「大学院が学術研究の最先端で創造的な成果をあげていくためには、~~異分野異質なもの~~との交流の中から新しい発見やヒントが生まれるようになっていることが重要」といった過去の答申の指摘や、~~学生本人~~の多面的な能力の展開、~~公正な採用~~~~といった点~~には十分留意しつつ、…

(理由) 「同質者」や「異質なもの」という表現にはやや違和感があります。一例を示していますが、検討してください。また、文末の「公正な採用」は前提なので、不要でないかと思います。

p. 35 2段落目 下

今後、優秀な人材の大学院への進学を促進するためには、研究~~という営みには興味があるが、必ずしも大学院という存在に対して理解が深まっていない~~者に対して、大学院で学ぶ意義や修了後の見通しなどについて効果的に伝えていくことが課題となる。

p. 35 5段落目

特に、各大学は、博士後期課程に関する情報発信を行うに当たっては、学生が自らの将来的な姿をイメージし、あこがれを持てるような具体的なロールモデルの提供が必要である。その際、博士後期課程においては、修士課程、博士前期課程~~以上とは異なり~~、最先端の研究や学会への参加、論文誌への投稿等のより高度で魅力的な経験ができていているという情報も、~~修士課程、博士前期課程等の学生に対し~~アピールする事項となり得る。

(意見) 会議の際に、有信部会長による「とは異なり」の代替案(メモしそこなっていました)も併せてご検討ください。

p. 50 最下段

なお、従来型の大学教員及び研究者養成を目的とする人文・社会科学系博士課程については、学生の進路~~を確保し、その進路~~に対して責任を負うという観点からも、大学教員等の需要状況を踏まえて、自らその適正な規模~~の検討にを検討する必要があることには~~留意する必要がある。

全体をとおして

元号と西暦の併記を

17年、23年、30年 → 平成17(2005)年、平成23(2011)年、平成30(2018)年 等

【川嶋委員からのご意見】

○大学院のマネジメント体制の確立

3 ポリシーを中心として、教育課程としての大学院教育の質保証を図るためには、全学的な大学院教育の責任体制、マネジメント体制の確立が不可欠（たとえば、大学院部長、大学院教育担当副学長等の役職や、大学院教務委員会など）。

○区分制博士課程の見直し

21 p 第2パラグラフに指摘されているように、博士前期課程は、実際には修士課程との区別が付きにくくなっている。また、前期課程には修士取得を目指す学生と後期まで進学し、博士取得を目指す学生が混在し、必ずしも良い学習環境にはない（修士で終わる学生は、M1 から就職活動を開始し、勉学に熱が入らず、それが博士を目指す学生には悪い影響を及ぼしているケースもある）。そこで、この際、区分制博士課程は廃止し、大学院は修士課程、専門職課程及び博士課程に整理してはどうか。

そして、博士課程の前半は専攻分野、関連分野を幅広くコースワークで学修し、その修得度をQEで評価し、合格者に修士を授与。課程の後半は、専門分野のコースワークと博士論文執筆指導とする。なお、修士課程から博士課程への編入を可能とするため、体系的なコースワークを整備する必要がある。

修士課程は、多様な機能を認め、職業教育から高度教養教育まで幅広く高度な教育を提供することを可能とする。

最後に、専門職課程については、法曹人材育成は法科大学院であるが、医師・歯科医師・薬剤師等は学士課程で育成されている。高度な専門職育成については、制度上の一貫性に欠けているので、医師等の育成も専門職大学院に移行する方向で検討する。

○学士課程と大学院課程の役割の明確化

学士課程では教養教育と専門基礎教育を中心とし、高度な専門教育は大学院で行ってはどうかと、繰り返し提言されているにもかかわらず、実態はますます学士課程での専門教育の比重が高まっている。将来の大学設置基準の抜本的な見直しの際に、学士課程・修士課程・博士課程・専門職課程のそれぞれの役割の整理とそれらの明確化を図るべきである。

学士課程で教養教育を中心に教育すれば、博士課程で改めて教養教育を行う必要もなくなり、より高度な教育訓練に焦点化できる。また、より高度な専門教育を求めて進学者も増えるのではないか。

○リカレント教育の充実

大学がリカレント教育を本格的に提供するのであれば、大学のミッションに明確に位置づけ、全学的な責任組織（リカレント教育部、生涯学修部など）を設置する必要がある。

現状は、各学部・研究科で個別に提供しているに過ぎない。

さらに、社会人にとって夜間や土日開講が便利ではあるが、国立大学は土日が原則閉庁となっているため、教職員の勤務態勢の柔軟化とそれともなう各種のサポート体制が不可欠である（たとえば、子弟の世話）。たたき台43p第3パラグラフに指摘があるが、労働契約の見直しにはあまり熱心でないように思われる（問題の先送り）。そこで、何らかのインセンティブも必要。

○人文・社会科学系の大学院の充実、支援方策

イノベーションにはSTEM分野に加えて、人文・社会科学の貢献も不可欠である。しかし、たたき台47p、49pにあるように、この分野の大学院教育には課題が多い。一つは、専攻、専修当たりの規模が小さいために、体系的な教育課程の編成が難しいという課題がある。その解決策として、各専攻、研究科間での連携や連合大学院、共同教育課程などを推進したり、さらには、選択と集中を図ったりするなどの方策が必要かもしれない。

そのために、理工系、医歯薬系大学院とは異なる支援策を講じる必要もある。

【小西委員からのご意見】

P4 下から3行目 追加

～博士課程修了者の割合や企業の管理職等あるいは、専門職業人に占める大学院修了者の

P5 下から5行目 変更

市場的価値経済的価値

P6 上から9行目

STEAMのうち、Artには、人文・社会科学も含まれているが、11行目にも重複して書かれており、意味が含まれていないことになっているので文章を整理する。

P7 上から4行目 変更

～諸外国と比べても謙遜ないをリードする水準～

P25 最終段落 以下を追記

「現状では、実務の経験を有する教員が必ずしも、博士後期課程レベルを含む大学院を修了しているとは限らない。そのため、専門職大学院に博士後期課程を新設することで、このような現状の改善が図られて、高度専門職業人の養成が一層、充実されると考えられる。」

P26 上から10行目以降 変更

～反映状況を確認し、各分野の学協会等関係する職能団体等において高度専門職業人を目指す学生や社会人、さらにはステークホルダーへの積極的な情報発信を進めるべきである。また、各大学は、評価団体や職能団体関係する職能団体等、さらには～

P26 下から12行目 追加

～人材育成を行う専門職大学院の趣旨を踏まえた上で、後期三年のみの博士課程との連携を図ったり、教育課程の内容の工夫を～

P27 3段落目の上から6行目 追加

～研究者教員と同様に、例えば、専門職大学院に新たに設置する博士後期課程などでの、博士の学位取得を進めていくことが求められる。～

【佐久間委員からのご意見】

- [1] p. 15 下から 5 行目 ダブル・ディグリーとジョイント・ディグリーで実施大学数の調査年が異なっているのは何か理由があるのでしょうか。できれば同じ年の方が良いと思います。
- [2] p. 18 上から 17 行目 「リベラルアーツ」に関する記述は誤解を招く恐れがありますので、例えば、次のように書き換えてはいかがでしょうか。「学部段階でいわゆるリベラルアーツが展開されている場合、その教育の成果を引き継ぎ、」
- [3] p. 22 上から 1 行目 博士後期課程の差別化について記載がありますが、ここに挙げられている項目は、修士（博士前期）課程でも行われている場合があるので、例示としての説得力に欠けているようにも思います。
- [4] p. 22 上から 6 行目 「博士課程または博士課程修了者」とありますが、前者は、「博士課程在学者」の意味でしょうか、それとも博士課程の設置者、つまり、大学を意味しているのでしょうか。
- [5] p. 22 下から 9 行目 [4]と同じ
- [6] p. 23 下から 17 行目 「プレ FD」についての記述がありますが、教育スキルは、実践しなければ身につけませんので、学生への経済支援の箇所（35 ページ）で、もう少し踏み込んだ記述はできないでしょうか。
- [7] p. 26 下から 7 行目 実務家教員の割合が書いてありますが、現状でも望ましいとされる割合を超えているなら、表現を少し変えた方が良いでしょうか？
- [8] p. 35 上から 10 行目 23 ページの「プレ FD」との関連で、従来の TA のように、単なる教員の補助ではなく、教育指導の一部を担当するような TA あるいはティーチング・フェローへの雇用についても言及することはできないでしょうか。
- [9] p. 35 上から 12 行目 「博士の魅力」とありますが、「博士課程（に進むこと）の魅力」という意味でしょうか？
- [10] p. 35 下から 16 行目 [9]と同じ
- [11] p. 35 下から 15 行目 「具体的な見込み等の情報発信や進学を促す必要がある」とありますが、「や進学の促進」は不要では？
- [12] p. 35 下から 11 行目 博士後期課程をアピールする事項が挙げられていますが、ここに挙げられている項目は、修士（博士前期）課程でも行われている場合があるので、例示としての説得力に欠けているようにも思います。

[13] p. 47 下から 6 行目 一方で「改善されてきている」としながら、他方では「依然として低い水準」とあるのは平仄があっていないのではないのでしょうか。

[14] p. 50 下から 8 行目 [6]と同じ

以下は軽微な修正です。

[15] p. 2 下から 9 行目 行頭が 1 字下げになっている？

[16] p. 5 上から 16 行目 行頭が 1 字下げになっている？

[17] p. 19 上から 9 行目 社会的・市場価値 → 社会的・市場的価値

[18] p. 19 注 18 の 1 行目 もつて → もって

[19] p. 22 上から 11 行目 社会・市場価値 → 社会的・市場的価値

[20] p. 24 上から 15 行目 221 ページ → 21 ページ？

[21] p. 31 上から 11 行目 したがつて → したがって

[22] p. 34 下から 3 行目 見られるよう、 → 見られるように、

[23] p. 40 下から 3 行目 登録者へ → 登録者に対する

[24] p. 45 上から 11 行目 人文・社会科学系大学院において → 人文・社会科学系大学院に

[25] p. 46 上から 7 行目 その価値が → その価値を